

第一章 高須藩に生まれる

【誕生】

松平定敬は、弘化三年（一八四六）十二月二日に江戸の美濃高須藩上屋敷（東京都新宿区荒木町）で生まれた。父である藩主松平義建は、十男九女の子沢山で、定敬はその八男であった。桑名藩の系譜や染井霊園の墓碑では七男とされるが、高須藩では出産日に夭折した六男「微妙院」を加えているために生じた違いである。

母は側室で、今西久太夫の娘亀とされるが、『御家続帳』では奥山氏とする。後に会津藩主となる兄松平容保とは交流も多く、行動を共にすることが多かったことから、誤って同母兄とされることもあるが、容保の母は側室古森氏（千代、善孝院、古森義孝娘）であり、実際には異母兄にあたる。

義建の息子は幼名に金偏の文字が多く当てられており、定敬ははじめ欽之助と名付けられ、嘉永二年（一八四九）五月十一日に鏗之助（けいのすけ）と改められた。嘉永四年（一八五一）二月二十三日には六歳で存在が公に披露されるが、幕府には八歳と届出た。これは子どもが幼くして亡くなることが多かった時代に早く跡継ぎとなることができるようにするための書類上の工夫である。あわせて同日以降は正室規姫によって養育されることとなった。

幼少期の逸話はほとんど伝わらないが、嘉永七年（一八五四、改元して安政元年となる）に九歳で揮毫した一行書「松竹梅」が桑名市の鎮国守国神社にのこされており、子どもらしく大胆な筆使いで書いている。

【将軍位継承権を有する実家】

実家の高須松平家は、石高三万石に過ぎず知名度は低いものの、尾張徳川家唯一の分家で、本家当主の座に空席が生じればそれを補う役割を有していた。事実、高須松平家からは尾張徳川家の当主を四人も輩出し、その役割を十分に果たしていた。当然、御三家筆頭の尾張徳川家の当主となることができる以上、場合によっては徳川将軍家をも継承する資格を有する名門といえた。

ただし、徳川一門ではあっても将軍家、御三家、御三卿の七家以外は徳川姓を名乗ることを許されず、旧姓の松平を称していたが、当時としては松平姓を名乗ること自体が相当なブランド力を有していた。もちろん、徳川一門として三つ葉葵紋の使用を許されており、これがさらに箔を付けていたといえる。高須松平家の家紋は、正確には菊輪三つ葉葵紋といい、菊の葉が葵紋の周囲に巡らされたデザイン性の高いものである。

もともと尾張徳川家には二代光友の子を家祖とする三家の分家があった。すなわち二男義行を祖とする四谷家（後の高須松平家）、三男義昌を祖とする大久保家（松平出雲守家、後の梁川松平家）、十一男友著を祖とする川田久保家（松平但馬守家）である。各家の名称は江戸で屋敷を構えた地名に由来し、四谷家は四谷伊賀町（新宿区荒木町）、大久保家は大

久保（新宿区大久保）、川田久保家は川田久保（新宿区市谷柳町）にちなんでいる。これらの屋敷地がすべて新宿区内にあった理由は偶然ではなく、本家である尾張徳川家の上屋敷が市ヶ谷本村（新宿区市谷本村町）にあったことからその近隣に屋敷を構えたことによる。尾張藩の広大な上屋敷跡地は、陸軍士官学校を経て現在は防衛省の敷地になっている。昭和四十五年（一九七〇）十一月二十五日に作家三島由紀夫が四日市市大治田出身の森田必勝らとともに割腹自殺したのもこの地である。ちなみに尾張徳川家の中屋敷は千代田区紀尾井町の上智大学四谷キャンパス、下屋敷は新宿区戸山の戸山公園になっており、尾張藩に関する屋敷は防衛省を中心とした新宿区周辺に集中していたといえる。

四谷家は、寛文十年（一六七〇）十月二十五日、四谷新宿に屋敷地を拝領したが、延宝元年（一六七三）十二月九日には市ヶ谷本村に移り、さらに天和三年（一六八三）五月二十五日に四谷伊賀町に移り、明治維新を迎えるまでここに上屋敷を置いた。後にこの地に定敬を含む高須四兄弟が誕生することになる。

なお、大久保家は、後に所領を得て陸奥国築川藩（福島県伊達市）主となったが、四代通春が尾張徳川家を継いで七代宗春となり、川田久保家も二代義淳が高須藩主を経て尾張徳川家八代宗勝となったことから相次いで絶家した。

【御連枝の家格】

高須松平家のような御三家の分家は紀伊徳川家と水戸徳川家にもあり、これらは御連枝と総称された。紀伊徳川家では伊予国西条（愛媛県西条市）、水戸徳川家では讃岐国高松（香川県高松市）、陸奥国守山（福島県郡山市）、常陸国府中（茨城県石岡市）と宍戸（茨城県笠間市）に分家があった。紀伊徳川家では二代光貞の二男頼職が越前高森藩（福井県越前市）主、三男頼方（後の八代将軍徳川吉宗）が越前葛野藩（福井県丹生郡越前町）主となって分家していたが、いずれも本家相続によって絶家し、西条松平家のみとなっていた。

多くの文献が御連枝の家をすべて親藩として扱っているが、御三家の各家に認められた親藩としての御連枝は実質的に二家までに限られ、決して水戸家が優遇されていたわけではない。事実、正徳元年（一七一一）八月二十一日には宍戸藩主松平頼道には譜代に列することを命じている。同年には尾張徳川家の分家川田久保松平家も大名としての新知あるいは分知がないまま譜代大名之列を命じられている。それでも水戸家のみは三家の御連枝たる親藩が存在しているようにみえるが、高松藩は水戸藩の支藩ではなく、独立した藩であった。江戸城内の殿席（伺候席）を確認すると、以下のようになる。

大廊下 尾張・紀伊・水戸（以上御三家）、田安・一橋・清水（以上御三卿）

大広間 高須・築川（以上尾張分家）、西条・高森・葛野（以上紀伊分家）、
守山・府中（以上水戸分家）

溜之間 高松（水戸分家）

他に会津・松山・桑名・忍など

帝鑑間 川田久保（尾張分家）・宍戸（水戸分家）

このように高松松平家だけは殿席を御連枝が詰めるべき大広間ではなく家門や譜代大藩の当主らが詰める溜之間とされている。従って格式としては一段下に置かれていることが分かる。ただし、大廊下と大広間に詰める大名は政治への関与が認められず、幕府の要職に就くことができないものの、高松松平家は積極的に政治に関与できる溜詰とされ、親藩を代表して意見を述べることができた特殊な位置にあったと言える。

【美濃高須藩】

延宝九年（一六八一）八月十三日、四谷家の祖義行は信濃国の高井・水内・伊奈郡内で三万石の領地を与えられ、高井藩を立藩した。内訳は高井郡で一万七十四石余、水内郡で五千四十石余、伊奈郡で一万五千四百二十一石余が宛がわれており、現在は高井郡と水内郡が長野県中野市、伊奈郡が長野県飯田市にあたり、それぞれ新野陣屋（長野県中野市新野）と竹佐陣屋（長野県飯田市竹佐）を置いて支配した。

元禄十三年（一七〇〇）三月二十五日に高井・水内郡内の領地を尾張国と隣接する美濃国石津郡・海西郡内と交換したことで本拠を美濃国石津郡高須に移し、美濃高須藩が成立した。新野陣屋は幕府のものとなって藩庁は現在の岐阜県海津市海津町高須町に所在した高須陣屋に置かれ、伊奈郡内の領地は引き続き竹佐陣屋で支配を行った。

高須陣屋の跡地は城跡公園や海津明誠高等学校の敷地となっており、遺構はわずかに堀を残す程度である。平成五年（一九九三）に開館した海津市歴史民俗資料館（岐阜県海津市海津町萱野）は高須陣屋の表御殿を再現した城郭風建物になっていて大広間、御書院之間、山吹之間などが復元されている。

また、海津市に隣接する三重県桑名市桑名の六華苑（旧諸戸清六邸）には高須陣屋の御殿の一部を移築したと伝わる離れ座敷があり、旧高須御殿として一般に公開されている。四畳半二間の木造瓦葺平屋建ての入母屋造りで、奥の間には炉が切られ、床の間が設えてある。高須からの移築が事実であった場合、『高藩紀事』の高須陣屋御殿図を参照して確認すると、御殿中央部に茶室とそれに続く御小納戸があり、間取りが近似している。ただし、移築についてはあくまで口承であり、史料裏付けがあるわけではないが、桑名と高須を結ぶ縁を感じられる建物である。

【父松平義建】

高須藩の十代藩主義建はいわゆる高須四兄弟の父にあたる。高須四兄弟とは、幕末維新期に活躍した尾張藩主徳川慶勝、一橋家当主徳川茂栄（もちはる）、会津藩主松平容保、桑名藩主松平定敬を指しているが、それぞれ母は異なっている。定敬と容保の母はすでに触れたが、慶勝の母は正室規姫（水戸徳川家七代治紀の娘）、茂栄の母は側室尾崎氏（美佐尾の方、陽清院、幕府能役者尾崎佐太夫娘）である。ただし、茂栄の母については山福久兵衛の娘糸

とする史料（『高藩紀事』）もある。

実父義建は、高須藩の九代藩主義和の二男として寛政十一年（一七九九）十二月十三日に江戸の水戸藩上屋敷（文京区小石川、現在の小石川後樂園、東京ドーム）で生まれた。母は側室平松氏である。実は父義和は水戸徳川家六代治保の二男で、高須藩八代義居の養子となっていて継いでいたことから、父方の実家で生まれたことになる。

幼名を範次郎といったが、文化十年（一八一三）六月十一日に尾張藩十代斉朝より義建の諱を授かった。同十二年（一八一五）四月二十八日には初めて将軍に謁見して元服し、同年十二月十六日に従四位下侍従兼掃部頭となった。文政七年（一八二四）十月九日には掃部頭から高須松平家代々の当主が任ぜられる摂津守となり、父義和の死去に伴って天保三年（一八三二）三月六日に高須藩主となった。就封によって同年十二月二十八日には左近衛権少将に任官された。

十九歳となった文政元年（一八一八）七月二十三日に水戸徳川家七代治紀の娘規姫を正室に迎えており、同七年（一八二四）三月十五日に二男慶勝が誕生した。天保二年（一八三一）五月二日には五男茂栄、同六年（一八三五）十二月三十日には七男容保、弘化三年（一八四六）十二月二日には八男定敬が生まれた。定敬が生まれた時点で、義建はすでに四十七歳。高須四兄弟とはいうものの、定敬からみて兄の慶勝とは実に二十二歳もの年齢差があり、当時としては親子ほどの差があったといえる。兄弟のほとんどが夭折する中、十一歳差とはいえ、すぐ上の兄容保と仲が良かったことは理解できる。

【十九人兄弟】

定敬の兄弟姉妹にあたる義建の十男九女について出生順に紹介すると、次の通りである。

第一子	長女	潤姫	母規姫、夭折（戒定院） 文政二年（一八一九）閏四月三日生 文政二年（一八一九）八月三日没 一歳
第二子	長男	源次郎	母規姫、夭折（琳樹院） 文政三年（一八二〇）十二月六日生 文政五年（一八二二）四月二十七日没 三歳
第三子	二男	徳川慶勝	母規姫、当初の諱は義恕 諱を慶恕と改め、尾張藩主徳川慶臧養子、尾張藩主となる 諱を慶勝と改める 文政七年（一八二四）三月十五日生 明治十六年（一八八三）八月一日没 六十歳
第四子	三男	松平武成	母規姫、浜田藩主松平武揚養子、浜田藩主となる 文政八年（一八二五）七月三日生 弘化四年（一八四七）九月二十日没 二十三歳

第五子	四男	整三郎	母規姫、夭折（本瑞院） 文政九年（一八二六）十二月十二日生 文政十年（一八二七）八月二十一日没 二歳
第六子	二女	女子	母山福氏、夭折（顕乗院） 天保元年（一八三〇）三月二日 死産
第七子	五男	徳川茂栄	母尾崎氏、当初の諱は義比、美濃高須藩主となる 諱を茂徳と改め、尾張藩主徳川慶勝養子、尾張藩主となる 諱を茂栄と改め、一橋家徳川慶喜養子、一橋家当主となる 天保二年（一八三一）五月二日生 明治十七年（一八八四）三月六日没 五十四歳
第八子	三女	女子	母山福氏、夭折（顕実院） 天保四年（一八三三）三月十三日 死産
第九子	六男	某	母古森氏、夭折（微妙院） 天保六年（一八三五）一月十八日生 天保六年（一八三五）一月十八日没 一歳
第十子	七男	松平容保	母古森氏、会津藩主松平容敬養子、会津藩主となる 天保六年（一八三六）十二月二十九日生 明治二十六年（一八九三）十二月五日没 五十七歳
第十一子	四女	嘉姫	夭折（祥樹院） 天保九年（一八三九）六月二十日生 天保十年（一八四〇）三月二十一日没 二歳
第十二子	五女	多美姫	母古森氏、夭折（稚賢院） 天保十二年（一八四二）二月十四日生 天保十三年（一八四三）五月二十四日没 二歳
第十三子	六女	春姫	母古森氏、夭折（法性院） 天保十三年（一八四三）八月十二日生 嘉永四年（一八五一）六月二日没 九歳
第十四子	七女	幸姫	母今西氏、米沢藩主上杉茂憲室 弘化二年（一八四六）六月二十八日生 明治五年（一八七二）七月十七日没 二十七歳
第十五子	八男	松平定敬	母今西氏、桑名藩主松平定猷養子、桑名藩主となる 弘化三年（一八四七）十二月二日生 明治四十一年（一九〇八）七月二十一日没 六十二歳
第十六子	九男	鉄丸	母今西氏、夭折（良智院） 嘉永二年（一八四九）四月十九日生 嘉永三年（一八五〇）五月八日没 二歳

第十七子 八女 栄姫	母今西氏、夭折（玄暁院） 嘉永四年（一八五一）五月二十五日生 嘉永四年（一八五一）七月五日落 一歳
第十八子 九女 鐫通姫	母古森氏、夭折（智鏡院） 嘉永六年（一八五三）九月十五日生 安政三年（一八五六）六月八日落 四歳
第十九子 十男 義勇	母古森氏 高須藩主義瑞（兄茂栄の長男）養子、高須藩主となる 安政六年（一八五九）八月十二日生 明治二十四年（一八九一）二月二十三日没 三十三歳

実に多くの兄弟姉妹が夭折し、成人した者は十九人中七人に過ぎない。特に女子で成人したのは定敬の同母姉で一歳年上の幸姫のみである。九男鉄丸、八女栄姫も同母の弟妹であるが、二歳と一歳でいずれも夭折している。高須四兄弟を含めた男子六人はすべて藩主となっているが、越智松平家の養子に入って石見浜田藩（島根県浜田市）主となった三男武成は藩財政の建て直しに着手した矢先の弘化四年（一八四七）十一月二十八日に二十三歳の若さで亡くなっている。このとき定敬は二歳に過ぎず、武成については記憶すらなかったであろう。

また、高須藩を継いでいた五男茂栄は安政の大獄で隠居した兄慶勝の跡を継いで尾張徳川家に入ったことから、高須藩主の座はその長男義瑞（よしまさ）が安政五年（一八五八）六月四日にわずか一歳で継いだものの、万延元年（一八六〇）五月十八日に三歳で死去したことから、定敬の異母弟にあたる十男義勇（よしたけ）が同年七月四日にこれまたわずか二歳で継承していた。しかし、高須藩主義勇は戊辰戦争勃発時にはまだ十歳に過ぎず、とても活躍する年齢には達していなかったことから高須四兄弟には数えられていない。従って、成人して明治を迎えた男子は高須四兄弟だけであった。

【高須藩江戸上屋敷】

防衛省の前を通る靖国通りの合羽坂下交差点から新宿通りに向かって南に上がる坂道を津の守坂通りという。この津の守坂の西側一帯にかつて高須松平家の上屋敷があった。歴代の当主十三人のうち八人が摂津守を称したことから、松平摂津守家といえば高須松平家の別称となっていた。そのため屋敷前の坂道は摂津守坂と呼ばれ、いつしか津の守坂と言い慣わされるようになったのである。

現在は新宿区荒木町となった現地を実際に歩いてみるとよく分かるが、荒木町一帯は非常に高低差があり、一軒の屋敷があったとは思えない地形である。具体的にいえば中心に大きな窪地があるからである。しかし、この地には二万一千四百八十坪余もの広大な屋敷が実際に存在しており、屋敷内には高低差を利用した滝まで備えた広大な庭園が設けられていたの

である。

当時の絵図などで屋敷の地形を確認すると屋敷の中央部分に広い範囲の窪地があり、そこには策（むち）の池と呼ばれる大きな池があった。この池は規模が大幅に縮小されながらも現在ものこっており、浮島に祀られていた弁天祠も昭和三十一年（一九五六）に津之守弁財天として現在地に遷され、地域住民によって今も守られている。池の名称は、徳川家康が鷹狩の際に策を洗ったという策の井があったことにちなんでいる。現在にのこる策の池は北端の一部に過ぎず、当時は四谷大通り（現在の新宿通り）に沿って流れていた玉川上水から水を引き、池からは石組みの暗渠を設けて北側に流れる紅葉川へと排水していた。この暗渠は現在も現役の下水道として利用され、一部は下水道工事中に掘り出され、新宿区上落合の東京都下水道局落合水再生センターの敷地に復元展示されている。

庭園にあった滝は落差がおよそ四メートルもあり、明治五年（一八七二）五月に茶屋ができて以降は庶民の遊覧の場となった。同六年（一八七三）九月に桐座という芝居小屋が建つとさらに賑わいを増し、次第に料理屋も増えて花街となっていった。この辺りの芸妓は津の守芸者と呼ばれ気品が高かったと言われる。桐座は同十五年（一八八二）に廃業したが、同三十年（一八九七）頃には末広座という芝居小屋が設けられた。同三十三年（一九〇〇）頃に小よしという芸妓が陸軍中尉と心中したことで、策の池には小よしの幽霊が現れると言われて話題となり、末広座では四谷怪談を出して好評を博した。

荒木公園内には上屋敷の解説板が設置されており、そこには高須四兄弟の生地であることも記載されている。なお、荒木町とは明治五年（一八七二）に付けられた新しい地名で、付近には植木屋が多く新しい植木が活発にやりとりされていたことから新木横丁の名が起こり、荒木横町となっていたことから、隣接する当地を荒木町と名付けたといわれる。

上屋敷は藩主の住居としてだけでなく、他の大名や家臣などを招いてもてなす迎賓館としての役割を有しており、如琴亭、聴雨亭、怡々亭、鼓水亭といった茶室があり、邸宅は展望がきくように三階建てであったという。馬場や矢場も設けられており、馬術、弓術、砲術などの稽古も行われ、庭の仏殿では歴代藩主の命日などに拝礼が行われていた。また、屋敷を拝領した際に祀った屋敷神は、昭和二十七年（一九五二）十一月と昭和五十年（一九七五）四月の二度の遷座を経ながらも金丸稻荷神社として現在まで奉祀されている。なお、庭園にあった車力門にちなむ車力門通りの地名も当時を偲ばせてくれる。

○「津の守坂」碑

荒木町と三栄町を靖国通り手前までくだる坂である。別名を小栗坂ともいう。昔坂上の西脇に松平摂津の守の屋敷があったのでその名を略して津の守坂と称した。

○「美濃国高須藩主松平摂津守家上屋敷跡について」解説板

江戸時代、荒木町一帯には、美濃国高須藩主（現在の岐阜県海津市付近を領地とした藩）松平摂津守家（近くの津の守坂はこれに因む）の上屋敷がありました。屋敷内には

滝を伴った大池があり、回遊式庭園となっていました。この池は徳川家康が鷹狩りの帰りに策を洗ったという伝承があり、「策の池」と呼ばれます。池は、明治時代には一般に開放され、景勝地、花街として賑わいました。「策の池」は現在もその一部が残っており、「カップ池」と「津の守弁財天」として親しまれています。なお、荒木町の「車力門通り」は、上屋敷の甲州街道口にあった「車力門」に因むものです。幕末期、藩主松平義建の子としてこの屋敷に生まれた兄弟のうち、二男慶勝は尾張徳川家、五男茂徳（後の茂栄）は御三卿一橋家、七男容保は会津松平家、八男定敬は桑名松平家を継承しました。兄弟は幕府方と新政府方に分かれ、立場を異にしましたが、「高須四兄弟」と呼ばれ、激動の時代を生き抜きました。新宿区

○「策の池」解説板

江戸時代の古書「紫の一本」によれば徳川家康がタカ狩りの時近くにあった井戸水で策を洗ったので策の井戸とよび澄んだこの水が高さ四メートルに及ぶ滝となりこの池に注いでいたので策の池と呼ばれ「十二社の滝」「目黒不動の滝」「王子の名主の滝」等と並び江戸八井のひとつとして庶民に愛されていました。天和三年（一六八三）美濃国高須藩主松平摂津守がこの付近を拝領し上屋敷としましたので庶民から遠のきましたが約百九十年後の明治五年（一八七二）時の政府による廃藩置県の発令でこの池が解放され明治七年（一八七四）荒木町として住民の町となりました。人々は藩主の名を慕い「津の守」と呼び今なお愛称されています。現在では湧き水は減って池も埋まりこの滝つぼ跡に昔の語り草をわずかに残しています。古来池のほとりにあった弁天祠を昭和三十一年（一九五六）崇敬者によって現在地に遷座再建し「津之守弁財天」の御神明で町民の守り神としてお祭りし御加護を受けています 平成十七年（二〇〇五）乙酉卯月 荒木町々会 解脱会

○「金丸稲荷神社由来」碑

この金丸稲荷神社は御祭神に宇迦能御魂大神を奉斎しこの町の守護神として尊崇され今日に至る。天和三年西暦一六八三年美濃国高須藩主松平摂津守この地一帯を拝領上屋敷とされし折り藩主の守護神として金丸稲荷社を建立奉斎せられしよりと云う。この地を俗称津の守と云うは松平摂津守の上屋敷跡なるに起因する。明治五年（一八七二）七月の政令によりこの荒木町が誕生し町の発展は勿論津の守三業地も次第に繁栄し気品高き芸妓と三業の名と共に金丸稲荷大神は荒木町町民の暮らしの中に鎮座せられ爾来百有余年を経るに至る。大神は和合繁栄財宝出世安全又火伏せの神として崇められ古くは度重なる江戸の大火にも尚大正十二年（一九二三）の関東大震災にもその災禍を免れたりと伝えられる。昭和二十年（一九四五）五月二十四日の東京大空襲に際しては惜しくも全町が焦土と化し去ったが町民には一人の死者もなかった事はこれ偏に大神の靈驗あらたかなる由と推察される。昭和二十七年（一九五二）十一月に現在位置

の隣接場所に遷座し来たるも昭和五十年（一九七五）四月吉日敷地整理のため神社は町内有志及び三業組合又崇敬者の寄進によって再び遷座再興されたものである。御社殿の奉建に当り茲に無事息災を念じ朝夕に御社を迎ぎ神を敬う心を通じて町内の安穩にして幸福なる生活を築き町の繁栄を計り茲にこの輝かしい偉業を後世に伝うるものである。昭和五十年（一九七五）三月二十五日之建 金丸稻荷神社 荒木町々会長佐藤政義 同副会長三浦小三郎 同原五吉 建設委員 四谷三業組合長大久保義雄 同副組合長丸山キタノ 須賀神社宮司尾方伸輔奉斎 石斧号山下孝次郎刻

【安政江戸地震】

安政二年（一八五五）十月二日夜四ツ時、関東一円を安政江戸地震が襲った。この大規模地震はマグニチュード七．〇～七．一、震度は六強から七程度と推測され、高須藩上屋敷のある四谷は震度五の揺れがあった。確認できる記録で最も近い距離では、三番町（千代田区九段南）にあった佐野藩（栃木県佐野市）上屋敷にいた西村平八郎茂樹の『往時録』があり、「此日天晴て風なし。時候温なる方なりき。夜四ツ時を報ぜしにより寝に就かんと欲し便所に入りしに、忽ち大風の至るが如き音あり、西北の方より震動し来れり、第一震動やや静ならんとせし時、引き続き更に第二の大震動を来し、是にて家屋の崩壊する声にて魂塊を褫（うば）ふ」とする。程近い尾張藩上屋敷では「市谷屋形 中玄関敷式台潰、本家大損、殿中奥間向半潰式棟、広敷玄関大損、奥膳所半潰一棟、高廊下続潰二十一間、土蔵潰一棟、同半潰二十四棟、長屋半潰三棟、長屋潰九棟、同半潰五十二棟、練堀倒二百六十五間程、高堀倒四百間程、石垣崩二十七ヶ所」（『御城書』）のように大きな被害を出して震度五と推測されている。高須藩上屋敷の被害報告は見当たらないが、相当に大きな揺れがあったと思われる、恐らくは定敬も屋敷で被災したのであろう。ちなみに、兄容保の暮らす江戸城馬場先門内の会津藩上屋敷（千代田区、現在の皇居外苑）では「去ル二日夜之地震に而、馬場先御門内御上屋敷、南通り土堀並御馬見所残り、其余御住居向御長屋等悉震潰、其上御焼失」（『震災動揺集』）とあり、地震被害の上に火災も発生した。後に養子となる桑名藩でも深川の下屋敷で「右長屋一棟ヅゝ皆潰、其外大破」（『江戸地震邸宅破損之記』）という被害があったが、それでも江戸城内吹上御庭に避難した将軍家定に対してすぐさまご機嫌伺いを立て、老中久世大和守広周が焼火の間で対応している。将軍家からも上使が派遣されたことから、翌三日に藩主松平定猷自身が御礼のため登城したものの、老中が登城前で不在であったため羽目の間で側衆太田播磨守が対応している。

桑名藩では前年の嘉永七年（一八五四）六月十五日にも安政伊賀地震（伊賀上野地震）のため国許桑名で大きな被害が発生しており、桑名城では櫓や奥御殿が半壊し、石垣が崩れるなどの被害を受けたばかりであった。余震も長く続き、桑名藩では多度神社に祈願して藩士たちに御礼と洗米を配布した。この地震で三百人以上の死者を出した四日市では建福寺（四日市市北町）境内に「安政元年震災惨死者之碑」が建立されている。十月六日、幕府は震災被害を受けた津藩に二万両、桑名藩に五千両を貸与している。さらに十一月四日には安政東

海地震が発生して桑名は震度五の被害があり、翌日の安政南海地震でも震度五から六程度の揺れがあったとされる。

【上屋敷の火災】

安政六年（一八五九）二月二十二日、高須藩上屋敷は安芸広島新田藩（広島県安芸高田市）主浅野家の屋敷から出火した火事に巻き込まれて焼失し、定敬を含む藩主家族は一時的に尾張徳川家の上屋敷に退避し、四月二日には角筈村（新宿区西新宿）の高須藩下屋敷に移った。上屋敷は八月十二日によりやく仮住居が再建され、定敬は藩主家族とともに住み慣れた屋敷に戻った。

当時すでに父義建は嘉永三年（一八五〇）十月十六日に隠居して五男茂栄に家督を譲っており、同年十二月十一日以降は角筈村の下屋敷に移って作陶や茶の湯を嗜む悠々自適な生活を送っていた。その茂栄も安政五年（一八五八）七月五日に尾張藩主に転じていたことから、火災当時の高須藩主は茂栄の長男で、定敬の甥にあたる義瑞であった。一時的な避難とはいえ、養子に出る直前に父と同じ屋根の下で過ごすことができた期間と言える。